
砂色誘拐奇譚～sand & escape～

汀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂色誘拐奇譚（sand&escape）

【Nコード】

N9542G

【作者名】

汀

【あらすじ】

オリキャラ多い、汀の『イロ者少年少女シリーズ』。大阪府警の刑事が引き起こした、とある殺人事件から約1年。一人の少女が事件の関係者と関わるようになりました。刑事と少女と、大阪の熱血探偵が登場予定。

序・在りし日の残骸

8月中旬 深夜 大阪府内某所

落書きだらけの塀に手を懸け、よじ登り、向こう側の地面に降り立つ。

不法侵入自体は、数秒のうちにあっさりと成功した。

黒い半ソデに長ズボン姿の侵入者は、そのまま静かに奥へと進み始める。

いくら敷地が広くても、住宅地の真ん中でも、しょせん住人のいない邸宅。

敷地に入る姿を目撃されない限り、あるいは大音量で騒ぎでも起こさない限り、通報されることはない。

八月半ばの熱帯夜、満月ではないが月光は十分にある。

周囲の様子ははっきりと判別出来、動き回るのに困りはしない。

こんな時は、周りにある物を見ながら、ゆっくり目的の場所を探す余裕ができる。

だから彼女は、好奇心のままじっくり歩きまわることにした。

この場所にまつわる話は、人から聞いて知っている。



雑草の生えた日本庭園、落書きだらけの壁、車のない駐車場。

このまま数年放っておけば廃墟になりそうな、汚れたままの諸々の建物。

それらが示すのは、彼女以外にも不法侵入して家を荒らした馬鹿

がいたらしいということと、そんな家を手入れするものは最早いないという事実だ。

ここの主は、俗にいう名士だったらしい。

約1年前、この邸宅の敷地内にあった蔵が焼け、それから色々なゴタゴタがあつて名士の体面が致命的に傷つき、

全焼した蔵が取り壊されるのとほぼ同時、名士本人も含め、ここに住んでいた者達は夜逃げ同然に姿を消したのだという。

もう名士がここで暮らすことはなく、夜逃げした場所で、この土地と建物の売却を画策しているらしい。

1年近く放置された曰くつきの建物なんて買い手がつくはずないから、おそらく土地だけ売るのがだろうとの噂が流れているとか。

それが本当なら、これらの建物は近々取り壊されるのだろう。

近隣住人からは、自業自得だとも思われているらしい。

家を建てた資材と労力を丸々無駄にしたわけだが、そもそもそんな事態になったのは名士の責任。

事の経緯が知られた今、夜逃げした人間を悪く言う者はいても、擁護する者はいない。



月光が敷地を薄く照らす。

焦らず塀沿いに歩いていったから、彼女が目的する場所はすぐ見つけた。

母屋のそばにある不自然に大きい更地。

約1年前に燃えた蔵の、跡地だ。

彼女は膝をついて座り込み、更地の地面を柔らかく撫でる。

元々彼女の知らない所で起こった事件でも、何が起こったのかは教わっていた。

——名士は昔、殺人を犯した。

結果引き起こされたのは、名士を狙った仇打ち。

名士自身は殺されずに済んだ。ある探偵が殺人を阻止し、更に仇打ち人の自殺を止めたから。

だが自殺を止める過程で蔵が燃えた。

探偵の活躍で、『火事では』死者は出なかったらしい。



「……」

ズボンの土を軽くはたきながら、彼女は立ちあがる。

この事件についていろいろなことを考えたから、いろいろな感情が心の中にある。

事情を知識として聞いただけでは、当事者の心の中までは分からない。

事件に関わった者達は何を考えていたのか、聞いた事情と見た物を総合して、推し量^{おはか}るしかない。

どんなことがあっても、当事者に同情するのはともかく、同情して泣くのは止めようと思った。

他人事の事件ならまだしも、これからはそうも言えなくなる。

普通の人間でも泣くのは失礼なことで、まして自分のような年齢の人間が泣くほど強く感情移入するのは、当事者に対する侮辱だと教わっていた。

教えた人間に悪意は無かったようだから、きっとその教えは正しいはずだ。

彼女は、思案しながら入ってきた場所へと戻る。

明日から、出来る限り急いで計画に当たらなければならない。

12歳の彼女の年齢では、不審がられず動けるのは夏休み期間中までだ。

『坂田』という名の刑事が『郷司』という名士を殺そうとし、『服部』という探偵がその殺人を防いで――

それから1年経った、今。

『坂田』は裁判の判決を待っていて、府議会議員だった『郷司』は書類送検の後に夜逃げし、『服部』は今も学業のかたわら探偵をしているという。

そして彼女はもうすぐ、彼ら当事者のうち一部の人間と接触することになっていた。

序・在りし日の残骸（後書き）

あとがき

こんにちは、汀です。

難産続きでやっとこさ連載開始となりました。

予告したのが昨年の秋です。本当に時間がかかり過ぎですね。

相変わらずオリキャラ分多めで話が進みます。苦手な方はご注意ください。

とりあえず週2回連載が目標です。

第1話・牢獄は開かれた

社会に出ることはもう一生無いのだと、予想はしていた。

弁護士を含め、関係者も全員そう思っていただろう。

もうすぐ下るはずの判決で、その予測は当然に的中するはずだった。

逮捕される前、自殺が成し遂げられずに入院した時から覚悟は出来ていた。

亡父を殺された復讐とはいえ、4人殺した現職刑事に司法は甘くない。

いくら事情があっても凶悪犯であることには違いなく、それこそ刑を執行されるその瞬間まで罪の責任を負い続けるのだと。

被告人は、それまで当たり前のようにそう思っていたのだ。…が。

あの日、独房の中で眠っていた午前2時ちょうど。
前触れもなく突然に、その事件は起きた。



8月25日 深夜 大阪拘置所

まどろみを中断させるような、無理に突き回すような感覚があった。

やたら鼻を刺激する匂い。悪臭というほどではないが、寝ている人間を半覚醒させる程度には強い感覚だった。

生ゴミの類なんかではないと思う。そんなものとは丸つきり違う、

火薬か煙で生じるもの。

まどろみのまま、よく分からないまま、坂田祐介被告は眼を開けた。

目に映る壁、罵声、薄明かり、悲鳴、駆ける足音、うつらうつらとした状態ではそれらについて深く思考することはなく、だが、

明るくなる視界、けたたましいベルの音と、身体への衝撃、爆音……反射的に坂田は起き上がる。

部屋の電気が付いて、火災報知機が鳴った、衝撃は自分に激突した何かであり……

——ちよい待ちや、ここ独居房ちゃうんか……！！

自分の置かれた状況を思い出し、彼は枕元のメガネを驚掴みにする。そして、

「……！！」

腰を抜かしかけた。

見知らぬ少女が、坂田を見つめ座っていた。



まず目に付いたのは束ねた髪の色だった。金に近いが一応茶髪、に含まれるかどうか。

それから、外国人のようにも見える無表情な顔を見、黒いワンピースを見やり、

……どれくらいそうしていたのか、驚愕のまま時は止まったよう
で。

心臓が早鐘を打っているのを自覚し、深呼吸。
どうにか声を出す。

「あの、君誰な ツ……！」

不意打ちの様な凄まじい音と共に、部屋が軽く揺れる。

驚きのあまり身をすくめた。恐慌状態になりながら、心が粟立っているのを自覚する。

爆弾の音。ここに近いどこかで何かが爆発した。――でも何処で？

少女の反応は少し違った。

一瞬慌てた顔をしたがパニックは無く、腰を浮かして坂田にグツと近付いて来る。

独房の中で、見知らぬ彼女はこう言った。

「あたしはあなたを助けに来た！」

唾が飛んできそうな勢いで、うろたえる坂田の前で、彼女は確かに手を伸ばし。

「だから、あたしの手を取って！」

後から考えれば、まさに勢いに飲まれたとしか言いようが無い状態だったと思う。

何があったのか、どうすべきかなんて分かるはずもない深夜の独房。ただ、差し出された彼女の手を握り、

一瞬で意識が飛んだ。



風に触れる感覚で目が覚めた。

室内では感じようも無い、夜の屋外独特の感触だった。

——気づいたら拘置所の外におったんです。あの子の傍で。

後に何度も語ろうとするのだが、そうとしか説明出来なくなり、やがて思い出すこと自体を諦めることになる。

『誰が』外に出したのか、という問いに答えるのは簡単だ。だが『どうやって』外に出たのか、坂田本人には分からない。

ともあれ、この日この夜。

彼は拘置所そばの路上で、意識を取り戻したのだった。

第1話・牢獄は開かれた（後書き）

後書き

課題レポートが原因で投稿が遅れました。
次話は31日までに投稿予定です。

第2話・駆け抜けた夜

8月25日 深夜 大阪拘置所前

最初は、もうろうとしていた。

足元の路面の感触、微かに聞こえる遠くの喧騒、そして自分の傍にいる人間。

自分達以外誰も居ないらしい夜の道路、坂田は歩道にへたり込んでいて。

——何で、手え握られとんのや？

掌の感触に気付き、握っている手の主に視線を向ける。

少女も、真剣な眼差しで坂田を見下ろしており、自然に目が合っ
て。

「……!!」

刹那、坂田は独房での出来事をようやく思い出したのだった。



身震いするように一度息を吐くと、動揺はやや治まった。

何がどうなってるのか分からない。とにかく、この少女の正体を訊かなければ。

坂田共々街灯の真下に立ってるから、観察は容易に出来る。

やはり微妙な色の金髪と、黒いワンピースと、それから外国人かもしれない顔立ち。

独房では気付かなかったが、身長は坂田と比べてずっと低く、体型も幼い。

小学生というほどではないから、中学生だろうか。

「あの、君は」

彼女は、坂田の言葉を聞かずにまくし立てる。

「ゴメンナサイ説明する時間が無いの！ あたしは逃がし屋、事情は後で話すから走って！」

——『逃がし屋』？

坂田が言われた台詞を理解する前に、少女が動いた。ひどく焦っているようだが、強引としか言いようがない。力任せに腕を引っ張られ、立たされ、

「あ、っわ！」 「あ、……ゴメンナサイ！」

坂田は思いつきりつんのめった。

とっさに、空いているほうの手でガードレールを掴む。

「危なっ……」

沈静化したはずの心臓が再び早鐘を打つ。
もし転んだら色々と擦りむいていただろう。

「坂田さん、最近あまり走ってないの？」

「うん……、って、何で僕の名前知って」 「ゴメンナサイそれは話

せない」

　　「またも少女は質問を遮った。」

　　「まぐし立てるといふほどではないが、あくまで反論を許さない様子で説明する。」

　　「話すとき長くなるから。早くここから逃げないと警察に捕まるの、あたしが」

「へ？」

「何がどうなっているのかは後で話してあげる。だから、今は走って」

「え……」

　　坂田が立ち上がったのを確認すると、少女は無言で走り出した。どのくらい急いでいるのか、坂田にとってかなりキツイスピードで腕を引っ張っていく。

　　目の前の少女の背は坂田より低く、しかし足の速さは少女のほうが断然速い。

　　跳ねるポニーテールとワンピースを見つめ、腑に落ちないものを感じながらも、彼は抗えずに従った。

　　何故だか車がすれ違うこともない夜の道、街灯の光と引かれる腕だけを頼りに駆け続ける。

　　「一体何が起きているのかは分からない。」

　　「これが、現実の世界の出来事なのかどうかも。」

ただ、走る中で体が感じた汗や、握る手の触覚は、限りなくリアルな感覚だった。



そして、坂田の実感でかなりの距離を走りぬけた後。

息切れ寸前までなった頃に、ようやく少女の足が止まった。

彼女は疲れていないようだから、おそらく坂田が弱過ぎるのだろう。

逮捕以来ずっと続いた独房暮らしで、元刑事でも体力は落ちている。

「あの車、乗って」

「う、ん……」

ハアハア言いながら、坂田は少女が指さした先を見る。

路上に停まっている、黒い軽のワンボックスカーだった。

名前は分からないが、よくある車種だと思う。

ハザードランプが点いており、運転席に誰かが座っているのが辛うじて見える。

「坂田さん、……坂田さん！」

車の様子を見ていて、反応が一瞬遅れた。

「え、ちょっと……」

またも引っ張られバランスを崩しそうになり、坂田は慌てた。

果たして乗るべきか否か、どこに連れてかれるか分からないため一瞬ためらう。が、

「……簡単な事情は中で説明するから！ 乗って！」

言葉と勢いに、またも圧倒された。

誘導されるがまま二人で後部席に乗り込み、直後、車が走り出した。



「あの、」「運転席の人に話しちゃダメ、申し訳ないけどこれ着替えて」

車に乗るなり、今度は服を押し付けられた。

「ジャージ、上だけだけど着替えて。暗いけど見える？」

一応見える。

だが、一番の問題はそれでは無い。

坂田は少女に向き合った。

疲れていても、忘れてはならないことがある。

少女と坂田両方にとって、おそらく大事なこと。

勢いに飲まれっ放しで出来なかった質問を、今この場で為さなければ。

「あのさ、……君、誰なん？ さっき『逃がし屋』で」「ウン」

坂田のことを察した少女は、あっさり頷いた。

先ほど路上で意識を取り戻した時、この子は間違いなく『あたしは逃がし屋』と言った。

何をする仕事なのかは名前で察しが付くが、そもそもそんな仕事は聞いたことが無い。

彼女は、まるで、あの独房で出会った時のように顔を近づけてきた。

暗くてよく見えないが真剣な顔らしい。声質と雰囲気分かる。

「あたしは、逃がし屋。拘置所なんかから人を逃がすのが仕事で、……ビックリしたでしょ？　今回が初仕事なの」

「へえ……」

なるほど初仕事なら、聞いたことが無いのは当然か。

しかし、まだ大きな疑問が残る。

この少女は今日で初対面なのだ。

坂田を逃がす『動機』が無い。

「……でも、何で僕を逃がすんや？」

少女は、今度は微笑んだようだった。

そのまま、坂田にとって予想外の言葉を告げる。

「それはね、あなたを『逃がしてくれ』って依頼した人がいるから」

——え？

言われたことがすぐに飲み込めなかった。
ややあつて意味を理解し、坂田は驚いて少女に詰め寄る。

「それは誰が……!？」

「詳しくは後で話すね。早く着替えて。もう目的地に着いちゃうから。」

これ以上の質問は時間的に無理」

苦笑しながら、彼女ははっきり拒絶する。



言われた通り、着替えた直後に車はどこかの駐車場に停車した。
少女に従い、脱いだ服を抱えて車から降りる。

「ここ、短期滞在専用のマンションなんだって。部屋に案内するか
ら付いてきて」

そう言うと、逃がし屋の少女は手を握ってきた。
思わず身構えたが、今度は走り出したりはしなかった。
もう、警察に捕まる危険はなくなったらしい。

第2話・駆け抜けた夜（後書き）

後書き

相変わらず予定がずれています。

小説に限らず、やることが半分もできてないという不思議現象が続行中です。

……頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9542g/>

砂色誘拐奇譚～sand&escape～

2010年10月11日01時36分発行